鴨東通信

冬

2012. 12 No.88

◉日常語のなかの歴史2 …… すっぱぬく　山田雄司

◉てぃーたいむ …… 棚のような人・岩倉具視　佐々木克

◉エッセイ …… 《古事記一三〇〇年》から「陰陽道」の神々へ　斎藤英喜
摂関院政期と「民衆仏教史観」　森新之介

◉リレー連載　世界のなかの日本研究13 …… 日本研究における共通言語　岡田万里子

◉台湾便り　TSUJIMOTO@Taiwan-Univ. (2/4) …… 台湾の教育文化の底流を見た　辻本雅史

◉史料探訪 …… 「御江戸大絵図」　福澤徹三

思文閣出版

岩倉具視関係史料

［全２巻］

佐々木克・藤井譲治
三澤純・谷川穣　編

定説に変更を迫る新出史料

『岩倉公実記』の編纂にあたり利用された史料の最も主要な部分で、原文書を多く含み、未刊行書簡や書類も多い。維新史の定説に変更を迫る新出史料を活字化。

◎憲政資料室所蔵文書・対岳文庫所蔵文書・内閣文庫所蔵文書に次ぐ、第四の岩倉具視関係文書群

◎『岩倉公実記』編纂時に利用されたものの最も主要な部分で、その後大阪の質商に売却されたものと思われ、現在は海の見える杜美術館（広島県廿日市市）所蔵

◎一七二〇点の文書が二七二巻に成巻されている（ごく一部は未成巻）

◎東京奠都のいきさつを示す史料や、閣議の議案や決議の過程がわかる史料など、これまでに他の史料集などで紹介されていない未刊行書簡や書類が多数

【1月刊行予定】　▼A5判・総一〇九六頁／**定価 二五、二〇〇円**

日常語のなかの歴史 2

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

すっぱぬく【すっぱ抜く】

「すっぱぬく」という言葉は、現代では主として週刊誌が有名人の秘密を明るみにする時に使われる語であるが、江戸時代から使用例が見られ、「刃物を不意に抜きはなつ。」の意もある。そのため、語源についても二つ考えられており、いきなり刃物を抜くの意である「すっぱと」から成立したとする説と、戦国時代に武家に雇われた忍びの者である「すっぱ（水破）」が、思いがけないところへ突然現れることから成立したとする説がある。

擬態語である前者は容易に理解できるが、後者の「すっぱ」について、『時代別国語大辞典　室町時代編』（三省堂）では、①大名などに抱えられ、間諜をつとめた野武士などの出の者。②盗み・かたりなどをはたらいてまわる無頼の徒の称。と説明している。すなわち、一般に認識されている「忍者」のことなのである。ちなみに「忍者」の語の初見は、一七世紀中葉の忍術書においてである。

中世の辞書類を見てみると、『節用集』諸本に「すつぱ」が掲載されており、そのなかでも最も古い『文明本節用集』には、「水破胡乱義」と記されている。ゆえに遅くとも一五世紀後半には「すつぱ」という語が用いられていたことがわかる。『日葡辞書』にも、Suppa.スッパ：欺瞞、または、虚言。およびSuppana mono.スッパナモノ：浮浪者、または、人をだます者、など。とあり、戦国時代には疑わしかったり、人をだましたりすることを示す語として「すつぱ」が定着していたといえよう。

また、『武家名目抄』によれば、甲斐より以西の国々で、「透波（すっぱ）」と呼んだのに対し、関東では「乱波（らっぱ）」と呼んだとされる。その他、透破（とっぱ）・草・奪口（だっこう）など、「忍者」をあらわす語は多い。

現在三重大学・上野商工会議所・伊賀市による「伊賀連携フィールド」で忍者プロジェクトが進行中であり、忍者関連史料の調査やデータベースの作成を行っている。学術的研究を通じて新たな忍者像を提示していきたい。

（山田雄司（やまだゆうじ）・三重大学人文学部教授）

岩倉具視の手許にあった厖大な文書群

――二〇一三年（平成二五）一月に『岩倉具視関係史料（全二巻）』を刊行します。この史料は、広島県廿日市市の海の見える杜美術館に所蔵されている、岩倉具視関係の文書群で、総点数は一七二〇点におよぶものです。海の見える杜美術館の協力・支援のもと、佐々木克先生・藤井譲治先生・三澤純先生・谷川穣先生と京都大学・熊本大学の大学院生等によるプロジェクトチームで全文書の翻刻を進め、二〇〇八年から三か年は三澤先生を研究代表者とする科学研究費補助金の交付も受けて、作業が進められてきたものです。この新出「岩倉具視関係史料」は、どのような史料でしょうか。

岩倉具視関係のまとまった史料は、国立国会図書館憲政資料室、国立公文書館、そして京都の岩倉公旧蹟保存会の対岳文庫の三か所に分かれています。今回の「岩倉具視関係史料」は、新たな第四の文書群です。

この史料は、岩倉具視の生前はその手許にあったものがほとんどで、岩倉具視の伝記『岩倉公実記』（明治三九年刊行）編纂に際して利用されたものの最も主要な部分です。『実記』編纂時に蒐集されたものも一部加わっています。『実記』編纂時に岩倉家にあった史料としては、対岳文庫所蔵のものが知られていましたが、もっとあるはずだというのが我々研究者の感覚でした。今回の史料の発見で、その疑問が解けたわけです。対岳文庫中には三条実美・大久保利通・木戸孝允・伊藤博文書簡が合わせて数通ありますが、本史料には三条四三三点、大久保一九八点、木戸八一点、伊藤六六点の書簡等があり、大久保を除く三人のものはいずれもほとんど初出のものなのです。それだけでもこの文書の重要さがわかっていただけると思います。

てぃーたいむ

棚のような人・岩倉具視

――新出「岩倉具視関係史料」から――

佐々木克
（京都大学名誉教授）

運命的な出会い

もともとは岩倉の手許にあった本史料ですが、『実記』編者の多田好問（ただこうもん）名義で、大阪の質商櫟原新輔（いちはらしんすけ）に数回にわたって質入れされ、それが結果として質流れとなって櫟原さんの所有となったものです。本書の解題で藤井譲治さんが詳しく触れられていますが、よくぞ残しておいてくれたと思います。昭和の戦争前後のどさくさにもかかわらず、きちんと残してくれたこと

がうれしかったですね。しかも非常に丁寧に大事に保存しておいてくれたのです。大半の文書を成巻し、桐箱に収めています。表具もいい素材を使っています。また、表装するときに原文書や包紙を切り取るわけですが、その切り取った紙片さえも全て封筒に入れて保存しています。古代・中世文書でしたらそういうこともあるかも知れませんが、近代文書でそこまでしているのは見たことがありません。文化遺産として残しておこうという意識の表れだと思います。

同時に櫟原さんは、当時この史料を史料集として出版しようともしています。和文タイプでほとんどの文書を原稿化し、校正をした冊子も残っています。質屋さんがこれだけ丁寧に史料を保存して、しかもそれを自分の力で出版しようとしているという、すばらしい文化事業を考えているわけです。これには感激しました。

初めて史料の現物を広島に見に行ったときに、そのことを知って、これはやらなきゃならんな、という気持ちになりましたね。劇的な出会いです。

私が大学院生時代に、最初に原文書を手にとって整理したのは、対岳文庫の文書でした。歴史家としての出発点が岩倉具視文書であり、今また岩倉の史料と出会った。何か運命的なものを感じたのは確かです。やりましょうという感じでした。原本校正や年代比定などの作業は厳しい仕事でしたが、意欲的にやれました。これだけ内容のあるものがまとまって出てきたのですから、幸運としか言いようがない。大発見です。櫟原さんには感謝したいと思いますね。

具体的な政治過程が明らかに

――この史料によってどのようなことがわかるのでしょうか。

一つは、東京奠都の史料です。本史料の発見について、テレビや新聞などで詳しく報道してくれたので、ご覧になった方もいると思いますが（二〇一〇年五月共同通信配信記事、五月一七日『東京新聞』等に掲載）、奠都というのは都を定めることで、つまり東京という新しい都を定めたということです。東京奠都という事実は、みんな知っていますが、そのいきさつに関しての史料が全くなかったのです。今回の史料で、新しく都を定めるにあたって、政府の首脳部が検討している過程が明らかになりました。東京奠都については、最終的には天皇の命令である詔が出されるわけですが、最初は、詔として宣言するということも決まっていなかったのが、政府首脳の会議で決まったのです。岩倉具視による東京奠都の詔案文と、これについての議定・参与の意見が記された回状も本史料にあり、新しい都「東京」誕生のいきさつが明らかになりました。

よく、都は今でも京都だけだと言う人がいますが、そうではなくて、東京が誕生した段階で、都は京都と東京の二つになったのです。皆さんこの事実を意外とわかっておりません。京都という西の都と東京という東の都の二つができて、そして西の都から東の都に首都を移したということです。今でも都は二つなのです。

私は以前からそう考えていましたが、まさに史料そのものにより、これがその証拠ですと示すことができました。これは大きな発見でした。

もう一つは、公議・公論という言葉が王政復古の大号令や、五箇条の誓文にあるように、新政府の最も重要なスローガンでしたが、その公議の実態がどうだったのかというのは、実はあまりよくわからなかったのです。それが、今回の史料に残された閣議の議案や決議の過程がわかる議定・参与の押印文書類により、具体的に明らかになりました。どのような閣議でどういうものを材料にして議論をして、決議に至ったかということが、非常によくわかります。これも大発見の一つです。

その他にも、従来の定説を修正するような史料や、証拠が充分でなかったことを傍証するような史料もたくさんあります。細かく挙げればきりがありません。

棚のような人

また、岩倉具視という人物が実によくわかりました。本史料には、岩倉によるメモ、覚書がたくさん入っています。手紙の下書きも多いですね。これはつまり、手紙を書く場合でも内容をきちんと整理するということです。手紙だけではなくて、会議の前や意見書を起草する際にも、箇条書きでメモを作っているようです。その上で手紙を書いたり、意見書を作ったり会議に臨む。それは、自分の考えを整理するためでもあるのですが、相手にいかに伝えるかということを第一に考えているのです。だから、岩倉の主張や手紙を見ると明快でわかりやすいのです。人に正確に伝えるということを、常に配慮している人間。私はそういう見方をしています。

――岩倉具視といえば、明治国家の舵とりをした人物。超然としたイメージでしたが、意外です。

伊藤博文がヨーロッパに憲法調査に行ったときの話です。随員の一人に西園寺公望（きんもち）がいたのですが、伊藤が「岩倉さんは棚のような人だった」と言ったというのです。今の感覚だと「棚上げ」というと放っておく感じですが、ここではそういう意味ではなくて、難しい問題が起こってすぐ処理できないときは、ひとまず岩倉さんに預けておくということです。棚に預けておくと、岩倉さんがそれなりの方向性を見つけて、意見調整をして、解決の方向で処理してくれる。絶大なる信頼です。非常に頼りがいがあり、抜群の調整能力がある人物なのです。

ただ、西郷隆盛などに比べるとどうしても地味ですし、端的にいえば、今でも一般の人たちの岩倉像というのは、宮廷で陰謀をたくらんだ人物なのですね。いまだに講演のときに「孝明天皇の暗殺は岩倉さんですか」という質問を受けます（笑）。この孝明天皇暗殺説は、完全に否定されていて、孝明天皇は毒殺ではなくて、悪性の出血性天然痘の典型的な症状だということが、病理学的に明白になっています。もう二〇年ぐらい前に解決している問題なのです。そういう意味では岩倉の評判というのは、常にマイナスイメージがつきまとっています

岩倉具視の魅力

岩倉具視は陰謀をたくらむような人物ではありません。言動は明快そのものです。しかも一貫して権力を求めてはいないので、陰謀をたくらむ理由がありません。暗殺説がなぜ出てくるかというと、孝明天皇は公武合体論者であり、岩倉は倒幕論者だったからという短絡的な思考です。これは全く見当違いの話です。基本的に岩倉は、天皇を中心として、武家と公家が一体となって挙国一致の体制を作り、国家を立て直さなければならないと考えていました。カリスマ性がある孝明天皇という人物がいないと彼の構想は実現しない。一番中心となる人物を暗殺してどうなるんですか（笑）。

公武合体派・尊攘派など、対立の構図の方が、確かに幕末史は書きやすいわけです。しかし、現実はそうではなくて、対立する間でも、同じ目標、同じ課題を抱えていることもあります。対立というのは一時的なものです。現代の政治でも、意見の対立があっても、大きな目標が同じであれば手を結ぶわけです。政治の世界というのはそういうものです。対立だけでは政治が動きません。

――確かに、現在の政局をみるとよくわかります。

政治家にはいろいろなタイプがあります。田中角栄型の、決断実行型のタイプ。一方では田中内閣の日中国交正常化の時の外相で後に総理になった大平正芳。彼は熟慮調整型です。徹底的によく考えてあまりしゃべらない（笑）。意見調整して何とか対立したり分立しないようにする。岩倉具視はこの二つのタイプが合わさったような人物で非常に珍しいと思います。それでいて、軸がぶれない。まげないわけです。

明治六年の政変でも、三条実美はノイローゼになりましたが、岩倉は自分の信念を貫き、西郷隆盛の朝鮮への早期派遣を阻止するわけです。このあたりの詳細も今回の史料でより深くわかりました。岩倉は西郷達と談判し、国家のためを思えば、今派遣するべきではないと、断固信念をまげませんでした。決して自分の意見だけを述べて反対だ反対だというのではなくて、きちんと対応しながら、相手側の意見を受け止めてそれに対して論理的に返していくという形です。しかもこれは権力闘争ではありません。西郷が辞表を出したときに、何とか引き留められないかといって大久保に相談しているぐらいです。

決断をして実行をする、その前によく考える、そして自分の意思を押しつけるのではなくて、意見調整をして、明確に相手に伝える――。これが岩倉具視の真骨頂です。明治維新史を正しく理解するためにも、岩倉具視を正当に評価する必要があります。

（二〇一二年一二月九日　於・思文閣出版）

エッセイ

《古事記一三〇〇年》から「陰陽道」の神々へ

斎藤英喜

和銅五年（七一二）の成立から一三〇〇年目にあたるということで、今年は『古事記』が話題となった年であった。書店では『古事記』の関連本が並び、そこでは「日本最古の古典」「古代の日本人の精神」といったキャッチコピーが躍っていた。《古事記一三〇〇年》である。

しかしあらためて、「一三〇〇年」のあいだ『古事記』はどのように読まれてきたのか。一般に知られているのは、江戸時代の国学者・本居宣長が『古事記』の価値を再発見したということや、宣長以前では『日本書紀』がメジャーな日本神話の本として認識され、『古事記』はほとんど読まれていなかったが、にもかかわらず、南北朝期の最古の写本が名古屋の真福寺に伝わっているという情報ぐらいだろう。

けれども平安時代の儒学系官人たちをはじめ、中世の卜部氏たち、伊勢神宮の神官たち、さらに仏教寺院の僧侶たちのあいだにも『古事記』は細々ながら、確実に読まれていたのである。ただその「読み方」は、現代の古典を読むという態度とはまったく違っていた。『古事記』あるいは『日本書紀』というテキストを「注釈」という形で読み替え、あらたな「神話」へと作り替えていくのだ。そこには、現代のような『古事記』『日本書紀』の区別という認識はほとんどなかった。近年注目が集まった「中世日本紀」「中世神話」の世界である。

そうした「注釈」の手法から見れば、近世の宣長の『古事記伝』の注釈もまた、じつは『古事記』原典からは大きく離れた、近世独自な神話を作り出していたことが見えてくる。

たとえば高天原に出現した始原の神タカミムスヒ・カムムスヒは、宣長の注釈によれば、天地万物を生み出した創造主宰神として「虚空中」に忽然と現れた、「産霊日大神」と読み替えられていく。こうした宣長の『古事記伝』の注釈学を、中世神話に倣えば「近世神話」と呼ぶことができよう（詳しくは、拙著『古事記　不思議な一三〇〇年史』新人物往来社、『古事記はいかに読まれてきたか』吉川弘文館、を参照）。

さて、中世、近世における神話の変貌は、すなわちそこに登場する神々の変貌でもあった。仏教の知によって解釈された神話のなかでアマテラスは観音菩薩、あるいは大日如来と一体化し、さ

らに煩悩即菩提を表象する蛇体へと変身していった。あるいは荒ぶる神スサノヲは、オホクニヌシを排除し、出雲大社の祭神に鎮座し、善悪不二、邪正一如という本覚思想を身にまとう神へと変貌する。さらには古代神話とは別のルートから、第六天魔王や伊舎那天、あるいは荼吉尼天、新羅明神、摩多羅神という異国渡来の神々も登場してくる。仏教が土着化するなかから顕現したあらたな神々の相貌といえよう。《古事記一三〇〇年》という時空のなかには、これら知られざる神々がうごめいていたのである。

いや、彼らだけではない。《古事記一三〇〇年》の枠組みだけからは、その姿を見せてはくれない神々が、この列島社会の深層に棲息していたのだ。泰山府君、盤古大王、牛頭天王、金神、八王子、歳徳神、土公神――、冥界や暦・方位、大地、天体と関わる神たち。そう、陰陽道の神々である。

かつての陰陽師、安倍晴明ブームによって、いっときは、人びとの注目を集めた陰陽道であるが、陰陽師といえば鬼や悪霊と対決する呪術師というイメージが流布される一方、歴史研究からは、陰陽寮の役所に勤務する地味な役人という議論が繰り広げられていた。だが陰陽道の問題で見過ごせないのは、陰陽師たちが祭り鎮めてきた神々の来歴であった。それは近代以降の社会からは消失してしまったが、けれども京都の祇園祭の深層に、あるいは民俗信仰・習俗の断片のなかに陰陽道の神々は、したたかに生き延びていたのである。

こうした知られざる陰陽道の神々にスポットをあてて、彼らを「平成の世」に召喚したのが、二〇〇七年に刊行した拙著『陰陽道の神々』である。運よく、陰陽道の神たちは少なからずの読者に迎えられ、今回、「増補」を付した形で、ふたたび登場することになった。増補したのは、陰陽道の神々が「民俗神」へと根付き、変貌した、もっとも奇跡的な事例である高知県旧物部村の「いざなぎ流」と牛頭天王に関する論考である。その論考は、二〇〇九年にニューヨークのコロンビア大学で開かれた「陰陽道シンポジウム」で報告した内容にもとづく。どうやら陰陽道の神々は、もはや「日本」という枠組みをも超えて、まさしくグローバルな地平で探究すべき存在になりつつあるようだ。

それにしても《古事記一三〇〇年》の年には、『古事記』を通じて「日本」をめぐる紋切り型の言説が撒き散らされていた。曰く日本人の原点たる大らかな神々の姿、曰く自然と共生する日本古代の人びと……などなど。しかし『古事記』にたいするステレオタイプ化した言説は、あたかも昨年の「3・11」以降も、なんら変わろうとしない日本の現実を映し出すかのようではないか。わが陰陽道の神たちは、そうした「日本」への異議申し立てをせんと、ふたたびここに顕現するのである。

（佛教大学歴史学部教授）

エッセイ

摂関院政期と「民衆仏教史観」

森（もり） 新之介（しんのすけ）

ここ十年ほど、江戸時代が大きく脚光を浴びている。武士も家計のやり繰りに頭を悩ませ、町人も旅行や出版文化を楽しんだ、といった現代にも通じるところが人々の共感を喚（よ）んでいるのだろう。当時の乳幼児死亡率や出生時平均余命などを考えると、私などはあまり手放しで「江戸時代はよかった」と言う気にはならないが、いずれにせよ「横暴な代官に民衆が虐げられた暗黒時代」というかつての偏見は、今や薄れつつあると言ってよい。

しかしそれは、江戸時代が遠い昔となったことで生じた、最近の現象である。遡って明治の人々にとって、江戸時代は現代人にとっての昭和と同じく身近な、過ぎ去ったばかりの過去であった。しかも、明治は江戸時代を打倒して切り拓かれた時代であったため、江戸時代を羨み懐かしむようなことは、当時としてはなかなか難しかった。

そこで見出されたのが、遠い昔の鎌倉時代である。明治二十年代に、歴史を「貴族主義から平民主義へ」の推移と見る思潮が湧き起こると、「貴族の平安時代から武士の鎌倉時代へ」という歴史叙述は、「武士の江戸時代から平民の明治時代へ」というそれに重ね合わされた。そして、「平民主義は鎌倉時代に開花したが、明治維新では十分には実現しなかった。だから鎌倉時代の歴史を振り返って、明治の今に平民主義を実現しなければならない」という論調が目立つようになる。

かくして、鎌倉時代には「平民主義」なる理想が投影され、日本思想史の研究者もまたそこに「平民思想」を見出そうとしてきた。しかし鎌倉時代において、民衆が自ら執筆した思想書などは伝わっていない。そのため、法然や親鸞などの仏僧を民衆の代弁者と意義付け、これら「民衆仏教者」を中心として摂関院政期（平安時代の後期～鎌倉時代の初期）の思想史を叙述するようになった。今日でも根深いこの思想史叙述を、私は「民衆仏教史観」と呼んでいる。

平安末期の、つまり源平動乱のころのお公家様といえば、「やんごとない家柄に生まれ謀略に長（た）けていただけの、意欲も能力もない唾棄すべき存在」と考えられがちである。つい二年ほど前にも、ある少年向けの海賊漫画で、主人公の義兄弟が泣きながら「おれは……貴族に生まれて恥ずかしい!!」と告白している場面を私は

見た。紋切り型の貴族像は今なお再生産されており、それは平清盛や親鸞といった、摂関院政期の人物を主人公にした昨今のドラマや小説でも大差ない。

一口に「貴族」と言っても十人十色であるため、そのような唾棄すべき貴族が一人もいなかったとは言い切れない。しかし摂関院政期には、下々の暮らしを安定させて乱世を乗り切ろうと、病弱な体に鞭打ち心を砕いた貴族も存在した。その経綸抱負は、「高貴なる義務」と評してよいものだったように思われる。

貴族にせよ民衆にせよ、よい人もいれば悪い人もいるし、また同じ人がよいことをしたり悪いことをしたりもする。すべて是々非々で考えればよいと私などは思うのだが、少なからぬ人々は「貴族は救いようもなく悪く、民衆は非の打ちどころもなく正しい」と考えたがるらしい。

昭和二十二年に華族と貴族院が廃止されて以来、日本には「貴族」と呼ぶべき特権階級は存在しなくなった。しかしそれは、貴族主義との相克で実際社会を捉えようとする平民主義が消滅したということを、必ずしも意味しない。「少数の狡くて汚い連中が富や知識を独占し、大多数の自分たち民衆を虐げ欺いている」という理解は、前述のような創作物の中だけでなく、今も至るところで健在であるように思われてならない。

昨年の震災以降、全国では様々な流言蜚語や陰謀論が飛び交った。東北地方の農水産物が謂れなく忌避されるという風評被害については、日本の「ケガレ文化」と関連付ける指摘も聞かれる。ただしそれだけでなく、狂騒の背景には「政府は利権を守るため、不都合な真実を隠し国民を見捨てようとしている。それはいつの時代でも繰り返されてきたことだ」という予断もあったように思われる。大学院生活を仙台で過ごした者として、また民衆仏教史観を懐疑する者として、あの震災では胸が痛むとともに、いろいろなことを考えさせられた。

遠い昔の思想史を研究して得られるものは多い。「現代ならではだ」と思われがちな考え方や現象が、実は過去にも存在していたこと、逆に「いつの時代にもあった」と思われがちな考え方や現象が、実は現代ならではだということに気付くための、きっかけとなるからである。歴史に学んで思索を深めれば、日々を豊かにすることができる。いわゆる「温故知新」である。

しかも、摂関院政期の思想史を研究することには、別の意義もある。明治以来の人々が理想を投影してきた摂関院政期について、その実像は虚像とどのように懸け離れているかが明らかになれば、明治以来どのような幻想が投影され、どのように現実が捻じ曲げられてしまっていたかも浮かび上がらせることができる。それもまた、一つの「温故知新」ではないだろうか。

近刊の拙著『摂関院政期思想史研究』も、このような問題意識を遠景としつつ、民衆仏教史観に大きく修正を迫った一つの研究成果である。

（東北大学大学院専門研究員）

日本研究における共通言語

岡田万里子（おかだまりこ）

私が招聘されているミシガン大学日本研究センターは、一九四七年六月に設立された、アメリカにおけるもっとも古い学際的な日本研究の拠点である。日本に関連した研究を進めるミシガン大学の大学院生や研究者が所属し、また、客員研究者や客員芸術家を迎え入れている。

今年の秋学期には、弁士の片岡一郎さんが招聘され、毎週金曜日の夜に小津安二郎のサイレント映画が上映された。九月十四日に行われた第一回は、特別にキャンパス外のミシガンシアターで行われ、一七〇〇人収容の映画館に結構な人数の観客が集まっていた。ミシガンシアターは一九二八年設立の歴史的建造物でもあり、ライブ演奏もてつだって、映画上映の歴史をも感じる場であった。

この例に見るように日本に対する関心は細部にわたり、日本研究センターが主催する毎週木曜日のヌーン・レクチャーも、バラエティに富んでいた。これまでの同センターをはじめとする日本研究の成果でもあろう。この秋学期は、臓器移植に関する生命倫理、テレビアニメ、ひきこもり、自衛隊、震災後の東北など現代的なテーマが関心を集めていた一方、北海道入植の表象に関する近現代史や五輪塔と死生観をめぐる中世美術史、また私が担当した京舞井上流の歴史などにも一定の聴衆が集まっており、多様な話題設定が可能であることが印象的であった。ただし、質疑応答となると、臓器移植、テレビアニメ、ひきこもりといった主題が同時代的な共通の課題としてとらえられていたのに対し、自衛隊や震災のような日本に独特と考えられている事象や歴史研究の場合、理論的な側面にまで及ばず表層的な議論に終始してしまう嫌いがあった。

こうした傾向は、時折、アジア学会のパネルなどにも感じられるものでもある。しかし、議論の空洞化は、学際的な地域研究の弱点ともいえるかもしれない。共通の関心が一定の地域にしかない場合、事例を抽象化すると共有の言語が失われてしまうのだ。二〇一〇年に、カリフォルニア大学バークレー校で行われた「東アジアの身体的ナショナリズム」と題した学術会議に参加したことがあるが、この時は各地の事例報告から複数の共通の課題を抽出でき、最終日の討論は有益なものとなった。すなわち、日本研

究においても、日本というフレームワーク以外の共通基盤を持たないと議論の構築は難しいのではないだろうか。

しかし、一九九〇年代までの充実した日本研究の成果を考慮するならば、むしろ情報やモノの流通が激化したグローバリゼーション以降の特色ととらえることも可能かもしれない。日本に関連する多様な事象が紹介されることにより、旧来の「日本研究」がもはや共通語として機能しなくなったのではないだろうか。

むろん、情報が大量に流通するメリットは大きくもあり、日本もまた世界のどの地域とも同じように複雑な問題を抱え、それらが内外に絡み合った多元的な現代に存在していることが理解しやすくなった。最近は、アニメやマンガ、ゲームといったきっかけから日本に関心を抱く学生も少なくないが、彼らは日本の細部に触れ、そこから現代における新たな日本像を紡ぎだすことができるかもしれない。

来年一月から始まる冬学期には、そうした学生に授業を行うので、現在はその準備を進めているが、セミナーでもあるためいかに討論を進めていくかという点で意気込んでいる。私を受け入れてくださっている歴史学部と女性学部の教授、殿村ひとみ先生と共同で担当するので、種々の点について話し合わなければならない。授業は、日本研究センターのほか、歴史学部・女性学部の授業として位置づけられ、テーマは芸者を中心とした日本の文化史であるが、私なりの課題は、いかにアメリカの学生に、日本の事例を自分の問題として考えさせるかということである。

十年前、はじめてアメリカで講演をした時に、京舞を伝承する祇園や芸妓について、従来のアメリカのアカデミズムにおける理解を検証し、私なりの視点を述べたのだが、その議論に基づいて文章化した論文が今回招聘される評価対象となった経緯もあり、再びその主題と向き合うこととなった。世界的ベストセラーとなったアーサー・ゴールデンの小説『さゆり』やその映画化の影響であろうが、この十年で芸者に関する著述が倍増したようにも感じられた。

アメリカの大学の授業は、英語で書かれた論文や新聞雑誌記事などを事前に読ませ、それに基づいて討論を行うので、それがないと、授業のテーマにとりあげられない。そのため、課題論文探しを進めているのだが、そのなかで、興味深い書籍に出会った。*The Gei of Geisha: Music, Identity and Meaning* というその本は、Kelly Foremanという音楽学者の書いたものだが、四代目今藤長十郎の指導を受けたという彼女は、「芸者の芸」である日本の古典音楽について微に入り細を穿(うが)った叙述を行っている。音楽の分類名をはじめ固有名詞も多いが、きわめて真摯に対象をとらえ、従来一元的であった芸者理解に多元的な視角を提供している。

今回の渡米後垣間見てきた、多彩で詳細な日本への関心は、ディテールを積み上げることによって、今日的な日本像をあぶり出すというこの本の方法論と共通するのかもしれない。授業でどのような議論が行えるか、今から楽しみである。

（ミシガン大学日本研究センター・トヨタ招聘教授、歴史学部講師）

史料探訪 ㊿

御江戸大絵図

福澤徹三
（すみだ郷土文化資料館　専門員）

東京都墨田区向島にあるすみだ郷土文化資料館は、墨田区の歴史、風俗、伝統などを郷土文化として後世に継承していくとともに、区民一人一人がいつまでも墨田区を「ふるさと」として誇れることを目指して平成一〇年（一九九八）四月に開館した、区立博物館である。

今回紹介するのは、最近購入した「御江戸大絵図」（貞享三年・一六八六）という史料である。刊行者は林氏吉永で、この時期刊行された石川流宣や遠近道印によるものと同様に、隆盛を極めた江戸大絵図の一つである。

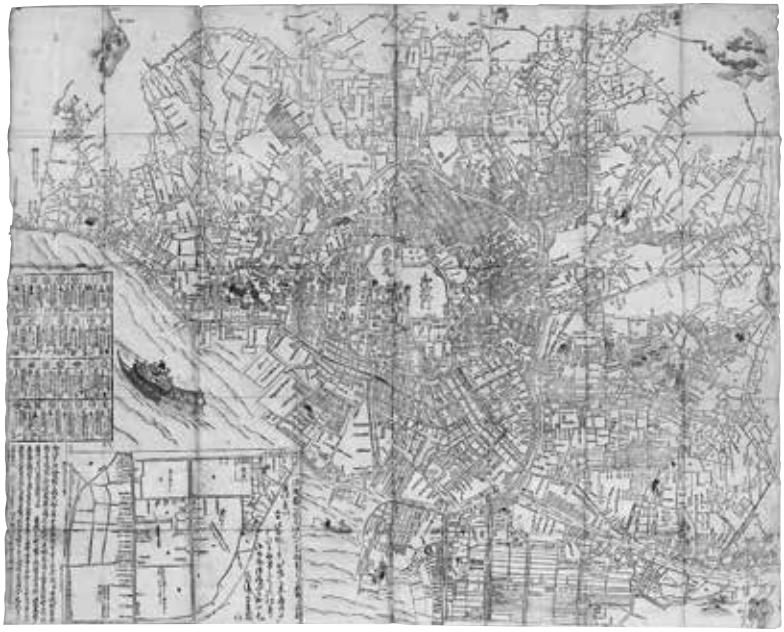
当館が江戸大絵図を収集している理由は、墨田区の起立に深く関わるからである。墨田区は大まかに向島と本所の二つに分かれる。北部の向島は中世以来の歴史を持つのに対して、南部の本所は近世初頭の開発にかかる地域である。家康の小名木川開削以来、隅田川沿岸を中心に少しずつ開発が進んでいた本所地域は、明暦の大火（明暦三年・一六五七）以降本格的に開発が進む。これは、同時期におこなわれた江戸市街地の拡大の一環にも位置づけられる事業であるが、もとが農村もしくは荒蕪地であったがゆえに、その表出の仕方が本所地域では個性的であった。

本所開拓は、寛文元年（一六六一）の両国橋架橋後急速に進み、寛文・延宝期には当初のプランの開発が終了して、武家屋敷を中心に入植がおこなわれた。しかし、たび重なる洪水のために幕府はいったん開拓方針を中止し、すべて上知となった。上知に際しての一筆ごとの請書が『東京市史稿』市街篇九に「南北本所地面請取帳・改帳」として残されており、その内容が国立国会図書館所蔵の『天和年中本所上地図』と一致することが筆者によって確認された。これにより、本所上知の状況を確認しうるのである。

さて、この絵図下方に見える、江戸市街地から見て隅田川対岸の格子状街区が本所・深川地域となる。そして、左隅の部分は本来さらに下方にあるべき部分を合印で示して、移し描いている。江戸大絵図は、新しく開発された本所・深川地域を余白部分に収載していったが、その時の工夫のひとつとして、あえて別図を作成した「分道本所大絵図・坤」（当館蔵）といったものもある。

本絵図が制作された貞享三年は本所上知がおこなわれた後にあたり、その様子を表しているものとして貴重である。短冊状の区

画の中は多くが空白で、ところどころに見られる「大久保平兵衛（代官）支配百姓地」「何茂百姓地」などという記述から、代官支配の年貢地になったことが明らかである。この大久保は、のちにこれらの地域が再度武家地に編入された時期に、「勤務よろしからず」として閉門処分を受けた大久保某である可能性が高い。



御江戸大絵図（絵図部分、すみだ郷土文化資料館蔵）

幕府は上知から五年後の貞享五年（一六八八）、再度方針を改めて本所開発を再開する。下野国烏山藩（からすやまはん）の御家騒動に連座して、弘前藩津軽家が神田鷹匠町から上屋敷を移転させられたのはその典型である。同藩はその後幕末まで上屋敷を本所の中心に構え、「本所に過ぎたるものは津軽屋敷」「本所公方」とよばれた。幕府の開発→撤退→再開の方針転換の経緯や理由については、不明な点が多い。

その後、宝永・享保期には、ほぼ幕末まで引き継がれる範囲の区域が市街化された。宝永元年（一七〇四）の大洪水では、本所地域が八尺（約二・七メートル）の水に浸かり、弘前藩主は浅草の菩提寺・智光院に避難を余儀なくされた。この洪水の被害を受けて、本所奉行は本所地域の川浚いや道造り、下水埋樋の整備といった抜本的な普請（ふしん）を建議し、大名御手伝い普請も受けて完成した。しかし本所地域では、武家や町人が自力でおこなうべき道普請が円滑におこなわれなかったようで、約一〇〇年後の享和期にも、再度抜本的な普請がおこなわれている。中小の旗本・御家人が集住する本所地域における「公共性」の維持の解明も、また興味のある課題である。

本所上知の前後は綱吉政権の初期で、堀田正俊が大老を勤めていた。「民は国之本」といった政治理念による幕政、元禄の地方

直しといった旗本・御家人政策、初期代官の粛正といった直轄領政策の展開のなかで、本所上知がどのように位置づくのか。享保期まで置かれた本所奉行の就任者は、若年寄支配下の旗本が交替で勤めている。本所地域の大名上屋敷は若干数にとどまる。ならば基本的には旗本・御家人屋敷の創出という文脈のなかで今後も検討を重ねていく必要があろう。本所開発研究は、江戸大絵図のような絵図史料と、弘前藩津軽家文書のような一次史料を組み合わせた複合的分析手法を、さらに磨いていく必要があるだろう。

すみだ郷土文化資料館では一二月一五日から「東京スカイツリー®開業記念特集展示　隅田川の情景 ―橋と渡し―」展を開催する。ここで紹介した「御江戸大絵図」は諸事情によりパネル展示にとどまるが、宝永～正徳期に作成された「分間江戸大絵図」を展示する予定である。これは、須原屋茂兵衛が最初に手がけた江戸大絵図としても著名である。この機会に、ぜひ御覧いただきたい。

《参考文献》

飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史　別冊・江戸図総覧』（築地書館、一九八八年）

黒田喬『明暦の大火』（講談社、一九七七年）

俵元昭『江戸の地図屋さん』（吉川弘文館、二〇〇三年）

長谷川成一『弘前藩』（吉川弘文館、二〇〇四年）

福澤徹三「企画展　まちができる―本所開拓とインフラ整備―」（『すみだ郷土文化資料館だより　みやこどり』三六、二〇一一年）

『新訂寛政重修諸家譜』二二（続群書類従完成会、一九六六年）

すみだ郷土文化資料館

東京都墨田区向島二丁目三番五号

TEL ０３－５６１９－７０３４

ホームページ　http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/

- 交通機関
  ①都営浅草線「本所吾妻橋」駅下車、徒歩８分
  ②東武線「とうきょうスカイツリー」駅下車、徒歩７分
  ③都営バス「言問橋」下車、徒歩２分
- 観覧料　個人１００円、団体（20人以上）８０円
- 休館日　毎週月曜日（祝日に当たるときは翌日）
  12月29日から1月2日まで
  毎月第４火曜日（祝日に当たるときは翌日）
- 開館時間　午前９時～午後５時
  （入館は午後４時30分まで）

2012年12月15日（土）～2013年2月24日（日）

東京スカイツリー®開業記念特集展示「隅田川の情景―橋と渡し―」展

江戸時代、隅田川下流には両国橋など五つの橋が架けられていた。その維持・管理には江戸幕府も頭を悩ませ、交通量が少ない場所には「渡し」が設置された。この展示では、これまで収集・保管してきた浮世絵史料とともに、古文書史料も交えながら、橋と渡しの実像に迫ります。

- おもな展示資料
  「分間江戸大絵図」、「江戸名所一覧双六」（二代広重）、「両国橋渡初之図」（国芳）、「団扇絵　三府開化橋」

台湾便り：TSUJIMOTO@Taiwan-Univ.

全4回

2 台湾の教育文化の底流を見た

辻本雅史（つじもと まさし）

授業の開始

九月一〇日、いよいよ授業が始まった。今回は授業に関わる体験報告をお届したい。台湾は秋入学、つまり新しい年度（中華民国一〇一年度）の始まりである。学内にいささかの緊張感を感じるのは、私が台湾での新米教師だからというだけではないだろう。

教授職の授業担当ノルマは、週三日、四科目（八時間）。私は週末の短期帰国も考えて、週の半ばに集中させる時間割の希望をだしておいたが、おおむね満たされていた。水・木は朝の一時限の授業。八時一〇分から一〇時までの一一〇分だが、中間に一〇分間の休憩を入れるから、五〇分授業二回で一コマの計算となる。授業時間は日本（京都大学）よりも一〇分長いが、間に休憩が入るためか、あまり負担は感じない。なお火曜日は第四時限、それは三時半からで、五時二〇分の授業終了時には、一一月ではすっかり暗闇に包まれている。

秋学期（第一学期）、春学期（第二学期）の二学期制がとられている。毎学期授業数は一八週で、その中に中間試験と期末試験が各一回含まれてはいるが、それにしても日本の一五週より三週も多い。第一学期の授業が終わるのは来年一月一一日で、一四日から冬休みとなる。その間、西暦の年末年始は元旦の一日だけが「開国記念日」という国民の祝日で休みであるほかは、平日と変わらない。もとより台湾の正月本番は、春節（旧正月）の方である。二〇一三年は二月一〇日が春節であるから、九日～一七日が年末年始の長い休みとなり、それが明けた一八日から、六月二一日まで続く第二学期の授業が始まる。

「服務学習」――学校掃除をめぐる教育文化

かねて私の授業科目は四科目と聞かされていた。ところが授業開始とともに回ってきた担当科目表には五科目が記されている。「服務学習」という得体のしれない科目が追加され

ていたのだ。これはいったいなんだ、とさっそく事務室に問い質しに行った。

「あ、それは学生の掃除の時間です。先生はとくに出ていく必要はありません。すべて担当の学生たちがチェックして、学期の最後に先生のサインを求めに行きますので、よろしく」というのが、事務室の教務担当者の答えであった。私はこれに大いに興味を持った。

確かに毎週水曜日の昼休みに、学生たちが学舎内外（共用部、図書館も含む）を一斉に掃除をしている。廊下の壁や床などは古く、一部は塗装も剝がれていてお世辞にもきれいとは言えないが、学内にゴミが落ちていることはほとんどない。それは実に気持ちがよいが、これは「服務学習」の成果であるに違いない。

学生たちに聞けば、「服務学習」は在学四年間のうちに三学期間、履修（従事）の義務がある、それは単位ではないが全学生必修の「学習」とされ、それを怠れば卒業が認められないという。もっとも「服務学習」は学内掃除と決まっているわけではないらしい。たとえば福祉施設等の社会ボランティア活動も、その活動企画書を大学に提出して「服務学習」と認定されることがあるという。要するに学生に社会参加やボランティア活動を促す教育的な意図があると思われる。他大学出身の大学院生に聞くと、「服務学習」のない大学も存在しているようだから、台湾内の全大学に共通ではない。しかし多くの大学で採用されていることからして、台湾教育部（日本の文科省）の奨励にもとづくものとみてよいだろう。

ここで思い出すのは、学校掃除を誰がするのか、という学校掃除をめぐる教育文化のことである。学ぶ児童・生徒自身がするのか、しない（清掃業者がする）のか、この世界的調査結果を「世界の学校掃除地図」にまとめあげた研究を、沖原豊氏を中心とした広島大学比較教育研究室が、かつて行ったことを思い出した（沖原豊『心の教育――日本の教育再発見』、学陽書房、一九八九年）。その研究の骨子は、児童生徒の掃除に教育的意図を見出す文化とそうでない文化に二分され、仏教文化圏（とりわけ禅宗系）・儒教文化圏では学校掃除を子ども自らが行うのに対して、キリスト教文化圏では、掃除を学校教育の文脈には意味づけないということだったと記憶している。確かに仏教では早朝からの掃除が大事な修行だったし、儒教でも子ども時代の学習項目として「洒掃応対進退の節」（『礼記』、『小学』など）と掃除があげられている。一方、キリスト教文化圏では、学校は子どもが学習する場であり、掃除は家庭の責任においてなされる教育、つまり「しつけ」や生活習慣に類するものと考えられている。こう考えれば、掃除をめぐる教育文化の違いが、今の学校教育にも、底流において生きているといわざるをえない。

台湾では、日本と同じく、初等・中等教育の学校での子どもの掃除が、教育の文脈に意味づけられているが、大学も例外なしにその原則が貫かれていると理解できそうである。台湾の教育における文化伝統とのつながりの深さが感じられた気がする。

教師節と中秋節

授業が軌道に乗り始めた九月二八日、学生から、一kgは優に超える大きな文旦（日本でザボン、ボンタンともいわれる柑橘類）、月餅にメッセージカードを添えて贈られた。その日は「教師節」。教師に謝意を表する日だという。台湾では、孔子の誕生日に当たるこの日を教師節と定めている。市内の孔子廟では、未明から孔子を祀る釈奠（せきてん）の礼が厳かに催されていたはずである。その儀式を演ずるために、将来教員をめざす市内の師範大学の学生たちが動員されていると聞いた。教育を儒教に関連付けて意味づける台湾の、伝統的な教育文化を、ここでも垣間見た思いである。そういえば近隣の小学校の正門正面に、孔子の大きな石像をみたことがある。ちなみに大陸の教師節は新学年の始まる九月一〇日らしい。日本では、近世に遡っても、師への謝意を示す教師節などの特定の日はもうけられなかったはずである。

旧 台北帝国大学創設以来の図書400万冊の蔵書を誇る総図書館。私も選書に関与した東亜文明研究図書の他、特殊文庫も数多い。

今年は中秋節（旧暦八月一五日）が九月三〇日。教師節の二日後であった。台湾では中秋節は国民の祝日で、月餅の他に文旦も食べる習慣があるらしい。文旦は黄色の大きな球体で、名月に見立てているのであろう。「月見団子」ならぬ「月見文旦」ということか。そういえば果実売り場に文旦が山と積まれていた。

この日は日曜日であったが、私は大学の研究室で仕事を済ませ、七時半ころ台湾大学のシンボル、椰林大道に出て思わず息を呑んだ。この大道は一直線に真東に走っており、その正面突き当たりに威容を誇る総図書館がある。シルエット状に並んだ大王椰子の並木の先、その図書館から、まさに中秋の名月が上がってきたところであった。まことに幻想的な瞬間であった。これを見るだけでも、台湾に来た意味があったのではないか、その時そんな風に思えるほど、しばし立ち尽くし見とれてしまった。

（台湾大学日本語文学系教授）

書評・紹介一覧　9～11月掲載分

※（評）…書評（紹）…紹介（記）…記事〔敬称略〕

北垣国道日記「塵海」
（紹）『史学雑誌』第121編第10号（前田亮介）

日本文学の「女性性」
（評）『ジェンダー史学』第８号（吉野瑞恵）

地域開発と村落景観の歴史的展開
（評）『歴史と経済』第217号（宇佐見正史）

日本古代典籍史料の研究
（紹）『史学雑誌』第121編第10号（大津透）
（紹）『アーカイブズ学研究』第17号（平澤加奈子）

近代日本と地域振興
（評）『交通史研究』第78号（山根伸洋）

戦国期権力佐竹氏の研究
（紹）『日本史研究』第601号（則竹雄一）

天龍寺文書の研究
（評）『日本歴史』第773号（山家浩樹）

一六世紀イングランド農村の資本主義発展構造
（評）『社会経済史学』第78巻3号（國方敬司）

中世長崎の基礎的研究
（紹）『日本史研究』602号（窪田頌）

古井喜実と中国
（紹）「朝日新聞」9/16朝刊（服部龍二）

軍事技術者のイタリア・ルネサンス
（紹）『史学雑誌』第121編第10号（上尾信哉）

訓讀註釋　儀式　踐祚大嘗祭儀
（紹）「神社新報」11/12（小林宣彦）
（紹）「神道フォーラム」11/15

増補改訂　新島八重と夫、襄
（記）「読売新聞」11/19夕刊（辻本芳孝）

世界を巡る美術探検
（紹）『月刊美術』第444号
（記）「読売新聞」9/6夕刊（木村未来）
（紹）「新美術新聞」9/11
（紹）『環境会議』第38号
（評）「北海道新聞」10/7（乾淑子）

京都　伝統工芸の近代
（紹）「京都民報」11/25（深萱真穂）

京都の歴史災害
（紹）「毎日新聞」9/30
（記）「中日新聞」9/30（蘆原千晶）
（紹）「宮崎日日新聞」10/7
（紹）「愛媛新聞」10/7
（紹）「日本海新聞」10/7
（紹）「京都新聞」10/21

新訂　法然上人絵伝
（紹）『寺門興隆』第168号
（紹）「中外日報」11/6

9月から11月にかけて刊行した図書

図　書　名	著　者　名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
京都　伝統工芸の近代	並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編	1641-3 C1072	2,625	9
京都の歴史災害	吉越昭久・片平博文編	1643-7 C1021	2,415	9
新訂　法然上人絵伝	中井真孝校注	1654-3 C3013	2,940	9
源氏物語　遊興の世界	逸翁美術館・池田文庫編	1655-0 C1091	1,050	9
近代日本の倫理思想	高橋文博著	1656-7 C3012	5,775	9
栄花物語・大鏡の研究	山中裕著	1640-6 C3021	7,560	10
人生の歩み　業績録レース−ゲスタエ	浅香正著	1661-1 C3023	3,150	10
憲政常道と政党政治	小山俊樹著	1662-8 C3021	7,350	11

9月から11月にかけて刊行した継続図書

シ リ ー ズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
御堂関白記全註釈　第1期複刻			寛弘元年	1645-1 C3321	8,505	9
御堂関白記全註釈　第1期複刻			寛弘２年	1646-8 C3321	5,985	9
御堂関白記全註釈　第1期複刻			寛弘6年【改訂版】	1647-5 C3321	5,040	9
御堂関白記全註釈　第1期複刻			長和元年	1648-2 C3321	8,820	9
御堂関白記全註釈　第1期複刻			長和２年	1649-9 C3321	11,655	9
御堂関白記全註釈　第1期複刻			寛仁元年	1650-5 C3321	7,875	9
御堂関白記全註釈　第1期複刻			寛仁２年上	1651-2 C3321	5,670	9
御堂関白記全註釈　第1期複刻			寛仁２年下～治安元年	1652-9 C3321	5,775	9
東寺百合文書	10	10	チ函二	1657-4 C3321	9,975	10
九条家本延喜式	3	3	巻十二・十三・十五・十六・二十～二十二	1622-2 C3321	15,750	10
正倉院宝物に学ぶ	2	2		1658-1 C1070	2,625	11
佛教大学鷹陵文化叢書		17	増補 陰陽道の神々	1644-4 C1014	2,415	11
京都大学史料叢書		9	京都雑色記録　第3巻	1627-7 C3321	14,700	11
新島襄を語る		別巻1	日本の元気印・新島八重（2刷）	1634-5 C1016	1,995	11

（表示価格は税5％込）

営業部より

▼学術書が大半を占める小社でございますが、一般書も刊行しております。最近では、来年のＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」の主人公を扱った『増補改訂　新島八重と夫、襄』。一般書と学術書との読者の断絶をいかにして克服するのかが課題ですが、基礎的な事をとっかかりに、より専門的な内容に踏み込める本があればと思います。読み進めるたびにより深みにいけるような、そんな本を作りたいです。（Ｉ）

☆フェア情報

早稲田大学生協ＢＣ　（東京都新宿区）
「人文系12社合同フェア」2月8日まで

京都大学生協　（京都市左京区）
「カタログフェア」（仮）　3月末まで

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

- ＴＥＮＤＯ八文字屋　（山形県天童市）
- 紀伊國屋書店新潟店　（新潟県新潟市）
- 今井書店グループセンター店　（島根県松江市）
- ブックデポ書楽　（埼玉県さいたま市）
- 芳林堂書店高田馬場店　（東京都新宿区）

編集後記

▼調整能力に長けていたという岩倉具視。彼が活躍した時代、日本国家の政策課題は現在よりはるかに多かったことでしょう。明治国家が沈むことなく船出できたのは、岩倉具視の調整能力の賜物ともいえそうです。自らを省みて学ぶところ大です。（h）

▼いつも年末年始は地元広島に帰省しているため、京都で正月を迎えたことは在住歴十ウン年のうちで数回しかない。しかしこのたびの年末年始は京都にいようと思うので、近所の六角堂の除夜の鐘でも聴きながら、静かに過ごそう。それでは来年もよいお年を。（大）

▼通勤電車の中で、電子書籍端末を持つ人を見かけるようになりました。私もそろそろ買いたいとは思っています。でもまだ読んでいない紙の本がいっぱいあるのです。いつもそこで二の足を踏んでしまいます。今年も私の電子書籍元年ではなかったようです。（M）

▼次の大河ドラマは映像が鮮やかになるとか。眺める人の思いで表情をかえる海。視聴者にとって大河への思いも十人十色。需要にあわせてここぞとばかりの関連書。濃密なものは本井先生シリーズがおすすめです。（江）

▼表紙図版：大邱停車場（絵葉書・部分、個人蔵／『植民地朝鮮の日常を問う』より

鴨東通信（おうとうつうしん）　四季報 No.88

2012（平成24）年12月25日発行

発　行　株式会社 **思文閣出版**

〒605-0089
京都市東山区元町355
tel　075-751-1781
fax　075-752-0723
e-mail　pub@shibunkaku.co.jp
http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン　鷺草デザイン事務所

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年４回（3・6・9・12月）刊行しております。
代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

摂関院政期思想史研究

【1月刊行予定】

森新之介著

摂関院政期における民衆仏教史観の研究史を整理し、当該期の思想家たちや事象の考察および実証研究を深めることにより、通説としての民衆仏教史観と切り結び、その実像を鋭く描き出す。日本の思想史上、極めて重要な時期の一つとされる摂関院政期の思想史叙述に修正を迫る一書。

第一章　民衆仏教史観の研究史
平民主義と仏教史叙述／村上専精の仏教史叙述／民衆仏教史観の闊歩と雌伏／古代対中世の闘争／正統対異端の闘争

第二章　末代観と末法思想
議論の前提／諸史料における末代観と末法思想／末代観の性格／藤原行成／後朱雀帝と小野宮実資、藤原資房／大江匡房／中御門宗忠／歴史思想の要因

第三章　九条兼実の反淳素思想
思想形成の過程／徳政と祈禱／徳政と内心／文治の意見封事

第四章　法然房源空の思想
不孝意識と凡夫意識／自行志向と民衆仏教者なる虚像／晩年の時機論と二門二行判／決定往生と三心四修

第五章　随分持戒と造悪無慚
法然房源空の随分持戒／一念義の造悪無慚／叡山衆徒の鬱陶

第六章　興福寺の訴訟と専修念仏者への朝譴
［興福寺奏状］／朝廷と五師三綱の交渉／興福寺による訴訟の位置付け／建永二年の朝譴／弟子たちの背師自立

もり・しんのすけ…一九八三年兵庫県生。早稲田大学第一文学部卒業、東北大学大学院文学研究科日本思想史専攻分野博士課程後期修了。博士（文学）。現在、東北大学大学院専門研究員。

▼A5判・三五二頁／**定価六、八二五円**

御堂関白記全註釈

全16冊　待望の完結

山中裕編

道長の日記「御堂関白記」の原文・読み下しと詳細な註により構成するシリーズ。本全註釈は永年にわたる講読会と集中講座による成果である。

国書刊行会・高科書店発行分である初版については復刊し、「寛弘6年」については、初版刊行時の特殊事情を考慮して、編者のもとで註釈部分の再検討を行い、大幅な改訂を加えて改訂版として刊行する。

御堂御記抄／長徳4年～長保2年　二〇四頁／**定価五、二五〇円**
寛弘元年［復刻］　二八八頁／**定価八、五〇五円**
寛弘2年［復刻］　二〇二頁／**定価五、九八五円**
寛弘3年　二一八頁／**定価五、七七五円**
寛弘4年　二二〇頁／**定価五、七七五円**
寛弘5年　一八〇頁／**定価五、二五〇円**
寛弘6年［改訂版］　一七〇頁／**定価五、〇四〇円**
寛弘7年　二二〇頁／**定価五、七七五円**
寛弘8年　二五六頁／**定価六、八二五円**
長和元年［復刻］　三〇〇頁／**定価八、八二〇円**
長和2年［復刻］　三九八頁／**定価一一、六五五円**
長和4年　二九〇頁／**定価六、三〇〇円**
長和5年　四四二頁／**定価一二、〇七五円**
寛仁元年［復刻］　二六八頁／**定価七、八七五円**
寛仁2年上［復刻］　一九二頁／**定価五、六七〇円**
寛仁2年下～治安元年［復刻］　一九八頁／**定価五、七七五円**

日本中世の社会と寺社

細川涼一著

【2月刊行予定】

◎律宗・律僧が中世社会で果たした役割を中心に、女性や被差別民など、歴史の主流からこぼれ落ちがちなものたちへ常にまなざしを注ぎ、境界領域から歴史を問い続けてきた著者の主要な研究成果を一書にまとめる。

内容

序論
第一章　黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』
第二章　網野善彦『中世東寺と東寺領荘園』
第Ⅰ部　中世律宗と公武政権
第三章　中世律宗と国家
第四章　中世における戦争と平和
第五章　叡尊の鎌倉下向と鎌倉幕府の女性
第六章　三条大宮長福寺尊鏡と唐招提寺慶円
第Ⅱ部　中世社会と律僧
第七章　忍性の生涯
第八章　覚如と定舜
第九章　西琳寺惣持と尼
第十章　唐招提寺釈迦如来像内納入文書と女性・虫・非人
付論1　幕末の女性とペットとしての狆
第Ⅲ部　中世の北野社と石清水八幡宮
第十一章　中世の北野社と宮仕沙汰承仕家
第十二章　『北野天神縁起』と鎌倉時代の北野社
第十三章　西京散所と北野社
第十四章　石清水八幡宮の柳禅尼如鏡と叡尊
第Ⅳ部　源義経の妻と母
第十五章　河越重頼の娘
第十六章　常盤
付論2　白拍子の実相

ほそかわ　りょういち…京都橘大学文学部歴史学科教授。

▼A5判・四五〇頁／**定価八、〇八五円**

神仏習合の歴史と儀礼空間

嵯峨井建著

【2月刊行予定】

神宮寺における神祇奉斎、寺院附属の鎮守社、仏教儀礼である神前読経、神職系図に基づいた神職周縁の仏法との関わり、神仏への天皇行幸、中近世をつうじた京都における神仏習合など、豊富な事例とともに神仏習合の諸形態を丹念にまとめた実証研究。

内容

第一章　神仏習合と儀礼空間
神仏習合の基本形態／社寺行幸と天皇の儀礼空間／神宮寺の神祇奉斎／仏教空間における神祇
第二章　神前読経と経典
大般若経の伝播と神仏習合／中世における神前読経の場／一宮・惣社における仏事と大般若経
第三章　神職系図の研究
伊勢両宮の神主系図／『津守氏古系図』の研究／上賀茂神社系図の研究／若狭彦神社社務系図の研究／宇佐八幡宮の神主系図
第四章　洛中洛外の神仏習合
鴨社の神仏習合／祇園社の成立と観慶寺／天龍寺の鎮守社霊庇廟について
終章
資料編　神仏習合年表・大般若経年表

さがい　たつる…下鴨神社祢宜。▼A5判・四三〇頁／**定価九、〇三〇円**

増補　陰陽道の神々

佛教大学鷹陵文化叢書17

斎藤英喜著

コロンビア大学での発表をもとにした論考「牛頭天王の変貌と「いざなぎ流」」を収録して増補再版。疫神や式神、泰山府君、牛頭天王、八王子、金神、盤牛王、そして式王子、呪詛神たち……。彼らは近代社会が封印し、消去した「陰陽道」の神々である。本書は、知られざる陰陽道の神々の来歴と素顔を平易に説く。

▼四六判・三五六頁／**定価二、四一五円**

中世の契約社会と文書

村石正行著

【1月刊行予定】

従来、中世の契約慣習のなかで債権者から渡され債務者の側に残る文書についての研究は等閑視されてきた。本書は売買・貸借などの契約関係を題材に、それに関わる契約者双方の文書作成のあり方を検証、「塵芥集」における法慣習なども援用しながら、双方向の文書授受とそれにまつわる文書作成が一般的におこなわれていた可能性を示す。

【内容】

序　章　契約における文書作成について　分析と課題

第一部　中世の契約と文書の作成

第一章　売買における双方向の契約文書

第二章　中世の借用と預状の作成

第三章　処分状の作成

第二部　売寄進と同日付売券・寄進状の作成

第四章　売買契約と売寄進

第五章　長楽寺復興運動と売寄進

第六章　洞松寺文書にみる売寄進と在地社会

第三部　中世後期禅宗寺院における文書目録作成と契約文書

第七章　中世後期曹洞宗寺院の地方伝播

第八章　中世後期地方曹洞宗寺院にみる仏事興行と文書目録の作成

附　論　北高全祝と龍雲寺

第九章　中世後期臨済宗寺院にみる土地集積と文書目録の作成
—「臨照山記録西岸寺規式」の文書目録を中心に—

終　章

▼A5判・三四〇頁／**定価七、八七五円**

むらいし　まさゆき…一九七一年生。長野県松本蟻ヶ崎高等学校教諭。

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

村井祐樹著

【1月刊行】

これまで実証的な研究が不十分であった戦国期の佐々木六角氏について、可能な限り一次史料を用い、六角氏や家臣の動向、実態など基礎的事実を明らかにする。附編として二三〇頁におよぶ関係記録史料集を付す。

【内容】

第一部　佐々木六角氏と家臣団

第一章　戦国時代佐々木六角氏の動向
高頼期　氏綱期　定頼期　義賢／義弼期

第二章　佐々木六角氏家臣団の実像
六角氏家臣団の分析　六角氏家臣団の分類

補　論　戦国期佐々木六角氏家臣名の再比定

第三章　佐々木六角氏家臣団の結合形態
相論の前提　芦浦安国寺相論　家臣団連合の実像

第二部　佐々木六角氏と領国

第四章　佐々木六角氏領国の荘園三村庄とその代官
三村庄について　三村庄の代官

第五章　佐々木六角氏と近江国内外交通
六角氏権力と保内・枝村紙荷相論　六角氏と北伊勢
六角氏と領国内交通

第六章　佐々木六角氏発給文書と領国
戦国期「室町幕府—守護体制」論の再検討　地域権力の確立

附　編　戦国時代佐々木六角氏関係記録史料集（稿）

▼A5判・五三〇頁／**定価一二、一八〇円**

むらい　ゆうき…一九七一年生。東京大学史料編纂所助教。

＊京舞井上流の誕生＊

岡田万里子著　【1月刊行予定】

京都の花街祇園に伝承され、特色的な型や伝承作品が話題にされる京舞井上流、日本舞踊のなかでも一際異彩を放つこの流派は、どのように誕生したのか。本書は、近世から近代にいたる流派の歴史を検証し、伝承作品群の成立背景を考証する。堂上・花街文化、そして、能、人形浄瑠璃、歌舞伎といった他の芸能の影響を確認しつつ、その豊饒な母胎――近世後期京都における芸能的世界の解明に挑む。

内　容

第一部　井上流の歴史
序　章　先行研究とその問題点
第一章　初世井上八千代と創造の基盤
第二章　二世井上八千代と流派の形成
第三章　三世井上八千代と伝承の確立
第二部　井上流の舞踊
序　章　言説の誕生とその傾向
第一章　井上流と摂家の芸能
第二章　井上流と花街の芸能
第三章　井上流と能
第四章　井上流と人形浄瑠璃
第五章　井上流と歌舞伎

▼A5判・五〇〇頁／定価九、四五〇円

おかだ まりこ…早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程（芸術学）修了。現在、ミシガン大学日本研究センター・トヨタ招聘教授、歴史学部講師。

茶道望月集（ちゃどうぼうげつしゅう）

白幸顕成著　【1月刊行予定】　顕岑院本（二）

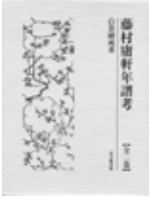
藤村庸軒（一六一三～九九）の孫弟子、久保又夢による享保八年（一七二三）成立の茶書。師の横井等甫から伝授された「庸軒流茶法」四十巻、「七ヶ条極秘切紙」三巻の内容を盛り込み、庸軒流茶法を詳述したもの。本書では、顕岑院本を翻刻する。

▼A5判・八〇〇頁／定価一六、八〇〇円

藤村庸軒年譜考（全二冊）

庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづき歳ごとに明かした年譜考。茶道を軸とした近世文化史の魅力を余すところなく伝える一書。上巻 天正三年～天和二年／下巻 天和三年～元禄一二年。人名／文献・史料索引付き。

▼A5判・一八四八頁／定価三六、七五〇円



藤村庸軒流茶書　顕岑院本（一）

京都の紫雲山くろ谷金戒光明寺の塔頭である顕岑院には多くの庸軒流茶書が伝えられている。そのうち三男正員が庸軒の茶話を筆記したと思われる『藤村庸軒茶談』や観山によって定められた庸軒流茶道の基本となる稽古次第を中心に収録。

▼A5判・五二八頁／定価一一、〇二五円

しらさき けんじょう…一九四一年京都・顕岑院に生まれる。京都大学大学院文学研究科修士課程（宗教学仏教学専攻）修了。密教図像学会常任委員。京都花蓮研究会会長。神戸女子大学名誉教授。

憲政常道と政党政治

【12月刊行】

近代日本二大政党制の構想と挫折

小山俊樹著

近代日本の政治史上において、「憲政の常道」とはいかなる意味をもったのか――

本書では、戦前二大政党論の形成と展開、そして崩壊について描き出し、日本の二大政党政治が抱える諸課題を提示する。戦前日本において、二大政党制の導入に込められた理念とは何か。二大政党制をめざす政治家やメディアの戦略とは。そして政党政治の崩壊と二大政党制の関係は、どのようなものであったか。これらの視角から、「憲政の常道」と日本の政党政治をとらえなおす。

序　論　近代日本における「憲政の常道」の意味

第Ⅰ部　大正政変期における二大政党論の構築

第一章　日露戦後における二大政党論の形成

第二章　対外硬派の二大政党論

第三章　吉野作造の二大政党論

第Ⅱ部　憲政常道論の形成と展開

第四章　「憲政常道」と「政界縦断」

第五章　政党内閣期の憲政常道論

第Ⅲ部　憲政常道と二大政党政治の崩壊

第六章　「協力内閣」構想と元老西園寺公望

第七章　憲政常道の崩壊と元老西園寺公望

結　論　近代日本における二大政党政治の構想と挫折

こやま としき…一九七六年広島県生。京都大学文学部（日本史学専攻）卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在、帝京大学文学部史学科専任講師。

▼A5判・三八四頁／**定価七、三五〇円**

八重さん、お乗りになりますか

新島襄を語る　別巻(二)

本井康博（同志社大学教授）**著**

新島八重ってどんな人――

戊辰戦争の会津では男装して勇ましく籠城・銃撃戦を繰り広げ、京都では当地最初のクリスチャンとなり、周辺から「悪妻」と非難されてもひるまずに自分を貫いた、モダンレディ新島八重。

八重の夫・新島襄を中心とした「新島ワールド」の案内人と自他ともに認め、永年にわたって夫妻の足跡をたどってきた著者でしか書けない濃密な八重入門の京都編。

【12月刊行】

▼四六判・三〇〇頁／**定価一、九九五円**

日本の元気印・新島八重

本井康博著　新島襄を語る　別巻(一)

永年にわたり新島夫妻の足跡をたどってきた著者でしか書けない、どこよりも濃密な決定版。話し言葉で紹介する八重入門の会津編。

▼四六判・二四六頁／**定価一、九九五円**

増補改訂　新島八重と夫、襄

会津・京都・同志社

早川廣中・本井康博共著

会津藩士の娘として、新島襄の妻として、激動の時代を先進的に明るく生き抜いた八重の魅力を、わかりやすく紹介するはじめての一冊。

▼四六判・二一二頁／**定価一、二六〇円**

植民地朝鮮の日常を問う

第2回佛教大学・東國大学校共同研究

佛教大学国際学術研究叢書③

韓　哲昊
原田敬一
金　信在
太田　修　著

佛教大学と韓国・東國大学校との3年間にわたる学術交流の成果。植民地下における日常生活の様々な事象、日韓の歴史認識のズレを検討するための4編。

日帝の韓国併呑に対する韓国民の認識と対応
韓哲昊（東國大学校教授）

韓国併合前後の都市形成と民衆—港町群山の貿易・生産・生活
原田敬一（佛教大学教授）

日帝強占期における「古都・慶州」の形成と古跡観光
金信在（東國大学校教授）

戦時期大邱の朝鮮人女子学生の学校生活—1937年の日記から
太田修（同志社大学教授）

【12月刊行】　▼A5判・三四〇頁／**定価二、九四〇円**

朝鮮近現代史を歩く

京都からソウルへ

佛教大学鷹陵文化叢書⑳

太田修著

朝鮮半島とそれにつながる人々にとって植民地支配と戦争の歴史はどのようなものであり、どのように記憶されているのか……。歴史と縁のある場所を訪れ、風景に触れ、人に出会ったなかから生まれた一書。

▼四六判・二七〇頁／**定価一、九九五円**

人生の歩み 業績録 レース—ゲスタエ

同志社・留学・ローマ・ポンペイ

浅香正（同志社大学名誉教授）著

著者の教育と研究の軌跡をまとめる。第1部で教育者としての歩み、第2部では研究者としての、ローマとポンペイ、キリスト教の発展と聖堂の成立を扱う。

▼A5判・二一四頁／**定価三、一五〇円**

王権と都市

今谷明編

日本、アジア・イスラーム、ヨーロッパの3領域から11篇の論文を収め、都市史のあり方を相互に比較検討した国際日本文化研究センターでの共同研究。

▼A5判・三七二頁／**定価七、一四〇円**

軍事技術者のイタリア・ルネサンス

築城・大砲・理想都市

白幡俊輔著

築城術の「理想都市」「軍事的機能」という2つの要素に着目し、変容過程を、建築家の残した著作や活動・軍事思想から解明。

▼A5判・二九四頁／**定価五、八八〇円**

一六世紀イングランド農村の資本主義発展構造

松村幸一著

16世紀イングランド農村における資本主義発展に関する主要な論文をまとめた一書。巻末に参考文献と索引を付した。

▼A5判・六六〇頁／**定価一四、七〇〇円**

日本史・考古学

安祥寺資財帳　京都大学史料叢書
京都大学文学部日本史研究室編　二〇一〇年刊　五、七七五円

九条家本　延喜式
東京国立博物館古典籍叢刊編集委員会編
（一）巻一・二・四・六・七甲・七乙　二〇一一年刊　一五、七五〇円
（二）巻八～十一　二〇一二年六月刊　一五、七五〇円
（三）巻十二・十三・十五・十六・二十～二十二　二〇一二年十月刊　一五、七五〇円

訓讀註釋　**儀式　踐祚大嘗祭儀**
皇學館大学神道研究所編　二〇一二年七月刊　一五、七五〇円

東アジアのなかの日本
上田正昭著　二〇〇九年刊　二、五二〇円

歴史のなかの天皇陵
高木博志・山田邦和編　二〇一〇年刊　二、六二五円

奈良朝人物列伝『続日本紀』薨卒伝の検討
林陸朗著　二〇一〇年刊　七、三五〇円

日本古代都市史研究　古代王権の展開と変容
堀内明博著　二〇〇九年刊　一五、七五〇円

日本古代典籍史料の研究
鹿内浩胤著　二〇一一年刊　七、〇三五円

御堂関白記全註釈
山中裕編
御堂御記抄／長徳4年～長保2年　二〇一一年刊　五、二五〇円
寛弘元年［復刻］　二〇一二年九月刊　八、五〇五円
寛弘2年［復刻］　二〇一二年九月刊　五、九八五円
寛弘6年［改訂版］　二〇一二年九月刊　五、〇四〇円
長和元年［復刻］　二〇一二年九月刊　八、八二〇円
長和2年［復刻］　二〇一二年九月刊　一一、六五五円
長和5年　二〇〇九年刊　一二、〇七五円
寛仁元年［復刻］　二〇一二年九月刊　七、八七五円
寛仁2年上［復刻］　二〇一二年九月刊　五、六七〇円
寛仁2年下～治安元年［復刻］　二〇一二年九月刊　五、七七五円

平安貴族社会の秩序と昇進
佐古愛己著　二〇一二年五月刊　八、一九〇円

平安京とその時代【残部僅少】
朧谷壽・山中章編　二〇一〇年刊　九、四五〇円

平安時代貿易管理制度史の研究
渡邊誠著　二〇一二年二月刊　七、三五〇円

仁明朝史の研究 承和転換期とその周辺
古代学協会編　二〇一一年刊　七、三五〇円

栄花物語・大鏡の研究
山中裕著　二〇一二年一〇月刊　七、五六〇円

後鳥羽院政の展開と儀礼
谷昇著　二〇一〇年刊　六、三〇〇円

摂関院政期思想史研究
森新之介著　二〇一二年十二月刊行予定　六、八二五円

中世前期女性院宮の研究
山田彩起子著　二〇一〇年刊　五、八八〇円

東寺百合文書
京都府立総合資料館編
第7巻　ニ函二　二〇〇九年刊　九、九七五円
第8巻　ニ函三・ホ函・ヘ函・ト函一　二〇一〇年刊　九、九七五円
第9巻　ト函二・チ函一　二〇一一年刊　九、九七五円
第10巻　チ函二　二〇一二年一〇月刊　九、九七五円

阿蘇下野狩史料集
飯沼賢司編　二〇一二年六月刊　七、八七五円

天龍寺文書の研究
原田正俊編　二〇一一年刊　一四、七〇〇円

東寺文書と中世の諸相
東寺文書研究会編　二〇一一年刊　一一、五五〇円

中世史料学叢論
藤本孝一著　二〇〇九年刊　九、四五〇円

中世京都の空間構造と礼節体系
桃崎有一郎著　二〇一〇年刊　七、五六〇円

天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史
三島暁子著　二〇一二年三月刊　六、九三〇円

中世長崎の基礎的研究
外山幹夫著　二〇一一年刊　七、八七五円

京都の都市共同体と権力 思文閣史学叢書
仁木宏著　二〇一〇年刊　六、六一五円

祇園祭の中世 室町・戦国期を中心に
河内将芳著　二〇一二年六月刊　四、七二五円

安房妙本寺日我一代記
佐藤博信著　二〇〇九年2刷刊　三、一五〇円

東国における武士勢力の成立と展開 思文閣史学叢書
山本隆志著　東国武士論の再構築　二〇一二年二月刊　六、八二五円

日本中世政治文化論の射程
山本隆志編　二〇一二年五月刊　八、一九〇円

戦国期権力佐竹氏の研究
佐々木倫朗著　二〇一一年刊　六、〇九〇円

戦国大名武田氏の権力構造
丸島和洋著　二〇一一年刊　八、九二五円

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究
村井祐樹著　二〇一二年十二月刊行予定　一二、一八〇円

戦国大名権力構造の研究
村井良介著　二〇一二年三月刊　七、三五〇円

織豊期主要人物居所集成
藤井譲治編　二〇一一年刊　七、一四〇円

京都雑色記録　第3巻　京都大学史料叢書
朝尾直弘編　二〇一二年十一月刊　一四、七〇〇円

住友史料叢書
住友史料館編
第24回　銅座方要用控二　二〇一〇年刊　九、九七五円
第25回　年々諸用留十番　二〇一〇年刊　九、九七五円
第26回　別子銅山公用帳十番・十一番　二〇一一年刊　九、九七五円
第27回　銅座方要用控三　二〇一二年十二月刊行予定　九、九七五円

禁裏・公家文庫研究
田島公編
第3輯　二〇〇九年刊　一二、三九〇円
第4輯　二〇一二年三月刊　九、六六〇円

近世史小論集　古文書と共に
藤井譲治著　二〇一二年四月刊　六、三〇〇円

松前景広『新羅之記録』の史料的研究
新藤透著　二〇〇九年刊　一二、六〇〇円

日本近世の宗教と社会
菅野洋介著　二〇一一年刊　八、一九〇円

中近世農業史の再解釈　『清良記』の研究
伏見元嘉著　二〇一一年刊　八、一九〇円

近世琵琶湖水運の研究
杉江進著　二〇一一年刊　九、四五〇円

近世上方歌舞伎と堺　佛教大学研究叢書
斉藤利彦著　二〇一二年三月刊　六、六一五円

近世長崎司法制度の研究
安高啓明著　二〇一〇年刊　五、九八五円

松岡恕庵本草学の研究
太田由佳著　二〇一二年三月刊　七、八七五円

一八世紀日本の文化状況と国際環境
笠谷和比古編　二〇一一年刊　八、九二五円

九州の蘭学　越境と交流
W.ミヒェル・鳥井裕美子・川嶌眞人編　二〇〇九年刊　二、六二五円

緒方洪庵　幕末の医と教え
中田雅博著　二〇〇九年刊　二、六二五円

熊本藩の地域社会と行政 近代社会形成の起点
吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編　二〇〇九年刊　九、四五〇円

近世の環境と開発
根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編　二〇一〇年刊　七、八七五円

一九世紀の豪農・名望家と地域社会
福澤徹三著　二〇一二年八月刊　六、三〇〇円

知の伝達メディアの歴史研究 教育史像の再構築
辻本雅史編　二〇一〇年刊　五、九八五円

武士の精神とその歩み 武士道の社会思想史的考察
アレキサンダー・ベネット著　二〇〇九年刊　五、〇四〇円

幕末維新期の陵墓と社会
上田長生著　二〇一二年三月刊　六、五一〇円

岩倉具視関係史料 全2巻
佐々木克・藤井譲治・三澤純・谷川穣編　二〇一二年十二月刊行予定　二五、二〇〇円

吉田清成関係文書 5　書類篇1
京大文学部日本史研編　京都大学史料叢書　二〇一二年十二月刊行予定　二〇、四七五円

北垣国道日記「塵海」
塵海研究会編　二〇一〇年刊　一〇、二九〇円

みやこの近代
丸山宏・伊從勉・高木博志編　二〇一〇年2刷刊　二、七三〇円

近代日本と地域振興 京都府の近代
高久嶺之介著　二〇一一年刊　六、八二五円

文人世界の光芒と古都奈良 大和の生き字引・水木要太郎
久留島浩・高木博志・高橋一樹編　二〇〇九年刊　八、一九〇円

近代数寄者のネットワーク 茶の湯を愛した実業家たち
齋藤康彦著　二〇一二年二月刊　四、二〇〇円

岡倉天心の比較文化史的研究
ボストンでの活動と芸術思想　清水恵美子著　二〇一二年三月刊　一一、二三五円

増補・改訂　西村茂樹全集
日本弘道会編／古川哲史監修
第7巻　訳述書3　二〇〇九年刊　一九、九五〇円
第8巻　訳述書4　二〇一二年四月刊　一八、九〇〇円
第9巻　訳述書5・日記　二〇一〇年刊　一八、九〇〇円
第10巻　論説1　二〇一〇年刊　一七、三二五円
第11巻　論説2・訳述書6 他　二〇一一年刊　一八、九〇〇円

西村茂樹研究 明治啓蒙思想と国民道徳論
真辺将之著　二〇一〇年刊　八、一九〇円

明治期における不敬事件の研究
小股憲明著　二〇一〇年刊　一三、六五〇円

近代日本の倫理思想 主従道徳と国家
高橋文博著　二〇一二年九月刊　五、七七五円

近代日本高等教育体制の黎明
交錯する地域と国とキリスト教界　田中智子著　二〇一二年三月刊　七、三五〇円

アメリカン・ボード200年　同志社と越後における伝道と教育活動　本井康博著　二〇〇〇年刊　五、二五〇円

同志社女学校史の研究　宮澤正典著　二〇一一年刊　二、九四〇円

William Smith Clark の教育思想の研究　札幌農学校の自由教育の系譜　小枝弘和著　二〇一一年刊　三、一五〇円

増補改訂　新島八重と夫、襄　会津・京都・同志社　早川廣中・本井康博共著　二〇一二年六月刊　一、二六〇円

日本の元気印・新島八重　新島襄を語る　別巻1　本井康博著　二〇一二年六月刊　一、九九五円

八重さん、お乗りになりますか　新島襄を語る　別巻2　本井康博著　二〇一二年十二月刊行予定　一、九九五円

魂の指定席　新島襄を語る6【残部僅少】　本井康博著　二〇〇九年刊　一、九九五円

ハンサムに生きる　新島襄を語る7【残部僅少】　本井康博著　二〇一〇年刊　一、九九五円

ビーコンヒルの小径　新島襄を語る8　本井康博著　二〇一一年刊　一、九九五円

マイナーなればこそ　新島襄を語る9　本井康博著　二〇一二年三月刊　一、九九五円

近代医療のあけぼの　幕末・明治の医事制度　青柳精一著　二〇一一年刊　【第24回矢数医史学賞】四、九三五円

憲政常道と政党政治　近代日本二大政党制の構想と挫折　小山俊樹著　二〇一二年十一月刊　七、三五〇円

韓国「併合」前後の教育政策と日本　佛教大学研究叢書　本間千景著　二〇一〇年刊　五、八八〇円

象徴天皇制の形成と定着　冨永望著　二〇〇九年刊　五、〇四〇円

古井喜実と中国　日中国交正常化への道　鹿雪瑩著　二〇一一年刊　三、九九〇円

地域開発と村落景観の歴史的展開　多摩川中流域を中心に　原田信男編　二〇一一年刊　九、四五〇円

京都の歴史災害　吉越昭久・片平博文編　二〇一二年九月刊　二、四一五円

房総風雅史　古代・中世編　小倉光夫著　二〇一〇年刊　五、九八五円

●世界史・東洋史●

人生の歩み　業績録　レース―ゲスタエ　同志社・留学・ローマ・ポンペイ　浅香正著　二〇一二年一〇月刊　三、一五〇円

ディドロとルソー　言語と《時》　十八世紀思想の可能性　小宮彰著　二〇〇九年刊　二、九四〇円

一六世紀イングランド農村の資本主義発展構造
大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書
松村幸一著　二〇一一年刊　一四、七〇〇円

高句麗壁画古墳と東アジア
門田誠一著　二〇一一年刊　九、〇三〇円

東アジアの交流と地域展開
北東アジア交流研究プロジェクト　藤井一二編　二〇一二年七月刊　五、〇四〇円

近世東アジア海域の文化交渉
松浦章著　二〇一〇年刊　九、四五〇円

中国五代国家論　佛教大学研究叢書
山崎覚士著　二〇一〇年刊　六、八二五円

立憲国家中国への始動　明治憲政と近代中国
曽田三郎著　二〇〇九年刊　八、四〇〇円

青島の都市形成史:1897-1945　市場経済の形成と展開
欒玉爾著　二〇〇九年刊　七、一四〇円

朝鮮近現代史を歩く　佛教大学鷹陵文化叢書
京都からソウルへ　太田修著　二〇〇九年刊　一、九九五円

植民地朝鮮の日常を問う　佛教大学国際学術研究叢書
第2回佛教大学・東國大学校共同研究　佛教大学国際学術研究叢書
韓哲昊・原田敬一・金信在・太田修著　二〇一二年十二月刊行予定　二、九四〇円

経済史・科学史

軍事技術者のイタリア・ルネサンス　五、八八〇円
築城・大砲・理想都市　白幡俊輔著　二〇一二年三月刊

東アジア経済史研究　第1集　中国・韓国・日本・琉球の交流
大阪経済大学日本経済史研究所編　二〇一〇年刊　四、二〇〇円

朝鮮科学史における近世　六、三〇〇円
洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的宇宙論　任正爀著　二〇一一年刊　九、四五〇円

茶の医薬史　中国と日本
岩間眞知子著　二〇〇九年刊

シーボルトが蒐集したシダ標本　七、三五〇円
加藤僖重著　二〇一〇年刊

技術と文明　日本産業技術史学会会誌
日本産業技術史学会編

第30冊	16巻1号	二〇〇九年刊	二、一〇〇円
第31冊	16巻2号	二〇一〇年刊	二、一〇〇円
第32冊	17巻1号	二〇一二年五月刊	二、一〇〇円
第33冊	17巻2号	二〇一二年八月刊	二、一〇〇円

春秋 京大和翠紅館 平安から平成まで 京の雅
木村幸比古・中根史郎・中村昌生著　二〇〇九年刊　二、九四〇円

伝統産業の成立と発展 播州三木金物の事例
桑田優著　二〇一〇年刊　六、八二五円

小児科学の史的変遷
深瀬泰旦著　二〇一〇年刊　九、四五〇円

緒方惟準伝 緒方家の人々とその周辺
中山沃著　二〇一二年四月刊　一五、七五〇円

京都療病院お雇い医師ショイベ 滞日書簡から
森本武利編著　二〇一一年刊　七、三五〇円

●比較文化・文化人類学・民俗●

一九二〇年代東アジアの文化交流
川本皓嗣・上垣外憲一編　大手前大学比較文化研究叢書　二〇一〇年刊　二、九四〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流Ⅱ
川本皓嗣・上垣外憲一編　大手前大学比較文化研究叢書　二〇一一年刊　二、六二五円

比較詩学と文化の翻訳 大手前大学比較文化研究叢書
川本皓嗣・上垣外憲一編　二〇一二年七月刊　二、六二五円

翻訳文学の視界 近現代日本文化の変容と翻訳
井上健編　二〇一二年一月刊　二、六二五円

着衣する身体と女性の周縁化
武田佐知子編　二〇一二年四月刊　六、〇九〇円

焼畑の環境学 いま焼畑とは
佐藤洋一郎監修／原田信男・鞍田崇編　二〇一一年刊　九、四五〇円

太子信仰と天神信仰 信仰と表現の位相
武田佐知子編　二〇一〇年刊　六、八二五円

祈りの文化 大津絵模様・絵馬模様
信多純一著　二〇〇九年刊　三、六七五円

口頭伝承と文字文化 文字の民俗学 声の歴史学
笹原亮二編　二〇〇九年刊　七、三五〇円

増補 陰陽道の神々 佛教大学鷹陵文化叢書
斎藤英喜著　二〇一二年十一月刊　二、四一五円

●宗教史・宗教学●

禿氏文庫本 龍谷大学善本叢書
大取一馬責任編集　二〇一〇年刊　一四、七〇〇円

典籍と史料 龍谷大学仏教文化研究叢書
大取一馬編　二〇一一年刊　八、九二五円

中世文化と浄土真宗
今井雅晴先生古稀記念論文集編集委員会編　二〇一二年八月刊　一三、六五〇円

新訂　法然上人絵伝
中井真孝校注　二〇一二年九月刊　二、九四〇円

法然伝承と民間寺院の研究
平祐史著　二〇一一年刊　九、四五〇円

西山浄土教の基盤と展開
五十嵐隆幸著　二〇一〇年刊　四、二〇〇円

『観経疏之抄』玄義分 中　浄土宗叢書
豊田元彦監修　二〇一一年刊　五、二五〇円

般舟讃私講
大塚靈雲著　二〇一〇年刊　三、六七五円

一休派の結衆と史的展開の研究
矢内一磨著　二〇一〇年刊　【全国大学国語国文学会賞】　八、一九〇円

江月宗玩 欠伸稿訳注
芳澤勝弘編著
乾　二〇〇九年刊　九、九七五円
坤　二〇一〇年刊　九、九七五円

瑞泉寺史
横山住雄著　二〇〇九年刊　二一、〇〇〇円

生命論と霊性文化　仏教への問い　佛教大学国際学術研究叢書
第20回国際仏教文化学術会議実行委員会編　二〇〇九年刊　二、一〇〇円

仏教と平和　佛教大学国際学術研究叢書
第21回国際仏教文化学術会議実行委員会編　二〇一一年刊　一、五七五円

神社継承の制度史　神社史料研究会叢書
梱山林繼・宇野日出生編　二〇〇九年刊　七、八七五円

美術史・茶道

金鯱叢書　史学美術史論文集
徳川黎明会編
第35輯　二〇〇九年刊　一一、五五〇円
第36輯　二〇一〇年刊　九、四五〇円
第37輯　二〇一一年刊　八、九二五円
第38輯　二〇一二年五月刊　九、九七五円

尾陽　徳川美術館論集
徳川美術館編
第5号　二〇〇九年刊　三、一五〇円
第6号　二〇一〇年刊　三、一五〇円
第7号　二〇一一年刊　三、一五〇円
第8号　二〇一二年五月刊　三、一五〇円

くずし字辞典
波多野幸彦監修／東京手紙の会編　二〇〇九年5刷刊　六、三〇〇円

平成新修古筆資料集　第五集
田中登編　二〇一〇年刊　二、六二五円

花園院宸記
宮内庁書陵部編
第18回　第28巻　元亨4年4月～12月（元亨4年具注暦）
二〇〇九年刊　三九九、〇〇〇円
第19回　第27巻　元亨4年正月～3月
二〇一〇年刊　三七八、〇〇〇円
第20回　第29巻　正中2年正月～6月（正中2年具注暦）
二〇一一年刊　三九九、〇〇〇円
第21回　第30巻　正中2年7月～12月（正中2年具注暦）
二〇一二年五月刊　三九九、〇〇〇円

革新の書人　河東碧梧桐
島田三光著　二〇〇九年刊　五、二五〇円

近代日本における書への眼差し
日本書道史形成の軌跡
高橋利郎著　二〇一一年刊　五、〇四〇円

茶の湯文化と小林一三
逸翁美術館編　二〇〇九年刊　二、〇〇〇円

茶会記をひもとく　逸翁と茶会
逸翁美術館編　二〇一二年四月刊　一、〇五〇円

京都　伝統工芸の近代
並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編　二〇一二年九月刊　二、六二五円

国際デザイン史　日本の意匠と東西交流
デザイン史フォーラム編　二〇一〇年4刷刊　三、〇四五円

応用美術思想導入の歴史
ウィーン博参同より意匠条例制定まで　天貝義教著　二〇一〇年刊　七、八七五円

動物・植物写真と日本近代絵画
中川馨著　二〇一二年一月刊　五、二五〇円

ジャポニスム入門
ジャポニスム学会編　二〇一〇年6刷刊　二、九四〇円

船簞笥の研究
小泉和子著　二〇一一年刊　六、三〇〇円

田能村竹田基本画譜　全2冊
宗像健一編著　二〇一一年刊　二九、四〇〇円

松花堂昭乗と瀧本流の展開
山口恭子著　二〇一一年刊　九、〇三〇円

藤村庸軒年譜考　全2冊
白嵜顕成著　二〇〇九年刊　三六、七五〇円

藤村庸軒をめぐる人々
白嵜顕成著　二〇一一年刊　一七、三二五円

藤村庸軒流茶書　顕岑院本（一）
白嵜顕成著　二〇一二年三月刊　一一、〇二五円

茶道望月集　顕岑院本（二）
白嵜顕成編　二〇一二年十二月刊行予定　一六、八〇〇円

茶譜　全2冊　茶湯古典叢書
谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂　二〇一〇年刊　二一、〇〇〇円

茶の湯と音楽
岡本文音著　二〇一二年六月刊　八、一九〇円

武野紹鷗　わびの創造
戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会編　二〇〇九年刊　一二、六〇〇円

近世京焼の研究
岡佳子著　二〇一一年刊　六、六一五円

風俗絵画の文化学 都市をうつすメディア【残部僅少】
松本郁代・出光佐千子編　二〇〇九年刊　六、八二五円

風俗絵画の文化学Ⅱ 虚実をうつす機知
松本郁代・出光佐千子・彬子女王編　二〇一二年三月刊　七、三五〇円

いけばなにみる日本文化 明かされた花の歴史
鈴木榮子著　二〇一一年刊　二、七三〇円

室町水墨画と五山文学
城市真理子著　二〇一二年三月刊　六、三〇〇円

宝物総覧 大本山くろ谷 金戒光明寺
浄土宗大本山くろ谷金戒光明寺発行　二〇一一年刊　二九、四〇〇円

正倉院宝物に学ぶ2
奈良国立博物館編　二〇一二年十一月刊　二、六二五円

世界を巡る美術探検
木村重信著　二〇一二年七月刊　二、五二〇円

森田りえ子作品集 1979-2011
森田りえこ著　二〇一二年四月刊　二五、二〇〇円

●日本文学・中国文学●

倶舎論音義の研究
西崎亨著　二〇一〇年刊　九、四五〇円

日本の心と源氏物語 シリーズ古典再生2
岡野弘彦編　二〇〇九年刊　一、八九〇円

歴史のなかの源氏物語 シリーズ古典再生3
山中裕編　二〇一一年刊　二、三一〇円

実国・師光全歌注釈
小田剛著　二〇〇九年刊　一八、九〇〇円

『狭衣物語』享受史論究
川崎佐知子著　二〇一〇年刊　一二、六〇〇円

源氏物語 遊興の世界
逸翁美術館・池田文庫編　二〇一二年九月刊　一、〇五〇円

絵巻 大江山酒呑童子・芦引絵の世界
逸翁美術館編　二〇一一年刊　一、〇五〇円

入門 奈良絵本・絵巻
石川透著　二〇一〇年刊　二、一〇〇円

禁裏本歌書の蔵書史的研究
酒井茂幸著　二〇〇九年刊　五、八八〇円

広瀬旭荘全集 詩文篇
岡村繁・井上敏幸編　二〇一〇年刊　三一、五〇〇円

幸田露伴の世界
井波律子・井上章一編　二〇〇九年刊　五、二五〇円

与謝野晶子と小林一三
逸翁美術館編　二〇一一年刊　一、〇五〇円

与謝野晶子の「源氏物語礼讃歌」
伊井春樹著　二〇一一年刊　一、四七〇円

漱石と世界文学
坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編　二〇〇九年刊　二、九四〇円

漱石文学の水脈
坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編　二〇一〇年刊　二、九四〇円

越境する漱石文学
坂元昌樹・西槇偉・福澤清編　二〇一一年刊　二、九四〇円

言語のあいだを読む 日・英・韓の比較文化
大澤吉博著　二〇一〇年刊　九、四五〇円

光芒の大正 川内まごころ文学館蔵 山本實彦関係書簡集
改造社関係資料研究会編　二〇〇九年刊　五、二五〇円

日本文学の「女性性」 二松学舎大学学術叢書
増田裕美子・佐伯順子編　二〇一一年刊　二、四一五円

中国語圏における厨川白村現象 隆盛・衰退・回帰と継続
工藤貴正著　二〇一〇年刊　六、三〇〇円

金瓶梅研究 佛教大学研究叢書
荒木猛著　二〇〇九年刊　八、九二五円

その他

奈良 千三百年ものがたり 【残部僅少】
すずきたみこ著　二〇一〇年刊　一、六八〇円

天翔ける白鷗 愚中周及の生涯
児玉修著　二〇一〇年刊　一、六八〇円

情熱の移植医 田中紘一の新たな挑戦
谷澤忠彦著　二〇〇九年刊　一、六八〇円

追憶の記 画家芝田米三と歩んだ人間賛歌の50年
芝田藤子著　二〇一〇年刊　二、一〇〇円

◎刊行図書はホームページでもご覧いただけます。
◎小社刊行図書を全点掲載しました「刊行図書目録」もございます。
代金・送料無料でお送りいたしますので、左記までお申し付けください。

思文閣出版　新刊事業部
〒六〇五―〇〇八九
京都市東山区元町三五五
電　話　〇七五―七五一―一七八一
FAX　〇七五―七五二―〇七二三
メール　pub@shibunkaku.co.jp

――思文閣グループの逸品紹介――

美の縁

び　よすが

三嶋りつ恵の作品はヴェネチアのムラーノ島で制作される。そこには三嶋が親方と呼ぶ職人達がいる。千年以上の間磨かれて来た伝統的な技法を今に伝える親方達と共に、時には作業の一員となって汗を流し、時には見守りながら指揮をとる。その日の偶然や瞬時のアイデアを取り入れて作品を仕上げていく。ヴェネチアン・グラスには彩色された物が多い中、三嶋の作品は一貫して無彩色である。理由は、「どんな色にも染まる事が出来る」から。その柔らかい透明感は、窓際で光を一杯浴びても、水を入れても、花を生けても、それと調和し、むしろ普段は意識しなかった光の反射や空間の雰囲気を一層引き立ててくれる。

❖ 菊の露 CRISANTEMO ❖

三嶋（みしま）りつ恵（え）

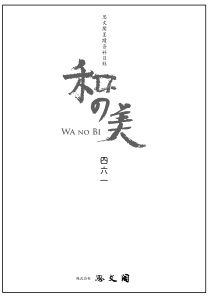
本作品は古い「アヴァンテゥーレ」という特殊な鉛を、溶けたガラスとひねりながら伸ばしていく事によって、鉛が格子状になってガラスの中に溶けこむ。伝統あるヴェネチアン・グラスの中でも失われつつあった技法を用いている。

今年五月には弊廊にて二度目となる個展を行った。本作品と共に掛けたのは松尾芭蕉の俳句。江戸中期の掛軸の前でも三嶋の作品は難なくとけ込み、古いものに新たな息吹を吹き込み、相乗効果を生み出していた。

（ぎゃらりぃ思文閣・山内徳太郎）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合せください。

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
http://www.shibunkaku.co.jp/
info@shibunkaku.co.jp

思文閣・美術品査定申込アプリ登場！

NEW

無料ダウンロード

ストアにアクセス、
「美術品査定」で検索！

Available on the App Store
ANDROID APP ON Google play

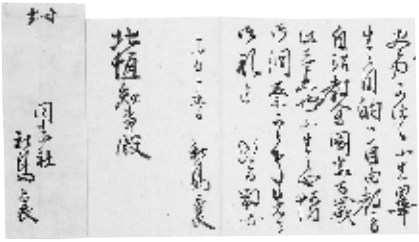
思文閣の専門スタッフが、お手持ちの美術品を無料で査定いたします。
丁寧なガイダンスと簡単操作の写真撮影・情報入力であなたの美術品の査定申込みをお手伝いする、スマートフォン/タブレット専用アプリ。お申込みいただいた内容を丁寧に拝見し、後日、査定結果をお知らせいたします。

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町355
TEL(075)531-0001 www.shibunkaku.co.jp
satei@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



新島襄自筆書簡　一通

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

鈴木治展

ぎゃらりー思文閣

平成25年1月7日(月)－31日(火)
10：00－18：00（日祝日休廊）

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町386
TEL(075)531-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/